



## 私の人生と音楽



中京大学心理学部教授

**鯨岡 峻** (くじらおか たかし)

1970年～1995年、島根大学教育学部で助手～教授を歴任。1995年から京都大学大学院人間環境学研究科教授に就任し、2007年に定年退官。同年より現職。専門は発達心理学、発達臨床心理学、保育心理学。

私が生まれて初めて購入したLPレコードは、高校1年生のときで、グリェムオーの弾くモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番と、クレンペラー指揮のモーツァルトの交響曲第40番、この2枚が私のクラシック入門でした。

それからの私の人生は、音楽と共にあったといっても過言ではありません。人生の節目、節目には、その当時聴きこんでいた特定の音楽があり、逆にその曲を聴くと、その節目の出来事が鮮やかに思い起こされます。それらのエピソードを繋ぎ合わせるだけで、私の人生を振り返ることができそうです。

浪人時代の孤独な時期は、ブラームスの交響曲第4番をそれぞれディスクがすり減るほど聴いて必死で持ち堪えたものでした。大学に入学した頃は、リヒテルの弾くラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とベームの振るモーツァルトの第41番の交響曲が愛聴盤でした。貧乏学生だったにもかかわらず、アルバイトで稼いだ金でレコードを買い、京都都会館の演奏会にもしばしば出かけました。ケンプもアシュイケナージも、アルゲリッチもリヒテルも、院生時代にみな京都都会館の大ホールで聴くことができました。

結婚した年に妻に送った誕生日プレゼントは、妻がライブを聴いて気に入っていたサンソン・フランソワのショパンのスケルツォのレコードだったと記憶します。

子どもが生まれ、狭いアパート暮らしでは音楽もまともに聴けま

せん。それに国家公務員の安月給ではレコードを買うどころではありませんでした。それでも、FM放送からテープデッキに録音して、深夜に寸暇を惜しんで聴いていました。30代、40代はピアノ曲と室内楽が中心でしたが、チャイコフスキーの交響曲第4番の第2楽章だけは別で、この出だしのオーボエの暗い旋律は、母の死の思い出と深く結びついています。

仕事が忙しくなると、却って音楽を聴かずにはおれなくなり、深夜でも音を絞って聴いていました。大学の改組の仕事に巻き込まれて帰宅が遅くなっても、ハイドンの弦楽四重奏「十字架上の七つの言葉」の第3楽章、第4楽章などをよく聴いていたと思います。疲れているときは、却って短調の音楽がしっくりきました。次第に仕事が増えて時間がなくなると、曲を通して聴くということができなくなり、小品や、一つの楽章を聴くことで辛抱せざるをえなくなりました。

還暦を迎えた頃から、急にピアノを弾きたいと思うようになり、大学に電子ピアノを置き、ヘッドホーンをつけて練習をはじめました。リヒテルの弾くシューベルトの最後のソナタの第2楽章を聴いて、これぞシューベルトの白鳥の歌だと思い、何としても弾いてみたいと思ったのがそのきっかけです。ピアノは一度もレッスンに通ったことがなく、まったくの独学です。高校時代にショパンのマズルカを弾きたいと思って、家で

隠れてしばらく練習したことがあっただけで、それ以後は弾いてみたいと思いつつも、鍵盤には触れていませんでした。それなのに、なぜか弾きたいという思いが募り、今に至っています。

ショパンは高校時代からマズルカがよいと思ってきましたが、この歳になってみるとノクターンが素晴らしいですね。13番のハ短調、15番のト短調のノクターンが、いま夢中になって練習している曲です。

京都大学を定年になり、中京大学に再就職することになりました。多忙は相変わらずですが、それでも機会があれば夫婦で音楽会に出かけ、音楽好きの旧友と会えば、音楽の話で酒が進むという生活になりました。

時折、最期のときの音楽は何にしようかと考えることがあります。先に触れたシューベルトの最後のソナタの第2楽章もいい、シューマンの音楽雑記帳の第9番（これは私に言わせればシューマンの葬送行進曲です）もいい、それとも、モーツァルトのレクイエムのラクリモーサにしようか、と考え出せばきりがありません。

パラダイムの転換を図るのだと、心理学の世界では異端を決め込んできた私ですが、心理学がどうなろうと私の知ったことか、とにかく音楽を聴きたい、ショパンを弾きたい、できればバッハもモーツァルトも弾きたい、というのが今の私の心境です。